
しめてやる

石榴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しめてやる

【Nコード】

N1892Q

【作者名】

石榴

【あらすじ】

おバカなのは認めよう。タンジュンなもの、認めよう。うん。そして、クソガキがあたしよりよっぽど頭良いもの認めよう。

でもね？

だからってクソガキにイヤミったらしくばかにされる覚えはないわよ！？

おバカなあたしと、年下のクソ生意気なガキとの攻防戦。

覚えとけよ、クソガキ!! (前書き)

このお話は、以下のお題で作成させて頂きました。

やってやる33の御題 (御題配布所*せつと様 (更夜亭) 閉鎖)

覚えとけよ、クソガキ!!

「何? また赤点?」

背後から不意に呆れ返った声と影が降ってきて、あたしはびっくりして掴んでいた紙の端をぐしゃりと握りつぶしてしまった。

あああ……しまった:

「う、ウルサイな!! 見ないでよ!!」

内心の動揺をなるべく見せないように顔の筋肉を総動員して何でもないような顔を作ると、余裕綽々の足取りであたしの目の前に移動して断りもナシに向かいの椅子に座ったそいつを睨みつけて言っ
てやった。

「見えたんだよ。可奈さん? で? また赤点?」

目の前の憎ッたらしい天敵は厭味ったらしくもう一度わざわざ問
かけて下さった。

うう……が、我慢よ、あたし!!

「別にベンキョ出来なくても生きていけるもん」

「でもこのままなら確実に留年決定だね?」

「……っぐ」

痛いトコを突かれて反論も出来ないあたしに、にやり、と人の悪い
笑みを向けるとそいつは愉快そうに口を開いた。

「僕と同じ学年で学びたいなら早く言ってよ。3年留年してくれたら
追いつくから」

「お、お断りよ!! 誰がッ……!!」

その言葉にあたしは思わずカッとなって椅子を蹴倒さんばかりの勢
いで立ち上がって叫んでしまった。

そんなあたしに嘘くさい笑顔を向けながら、目の前のクソガキはのた
まってくれちゃったのよ。

「可奈さん、図書館では静かにね?」

「……ッ」

「ほら、座りなよ、留年したくなかったら僕が教えてあげるからさ」

「……い……らないわよ!! 何でアンタなんかに!!」

「可奈さん、今ちよつと頷きそうになったでしょ。素直になった方が身の為だと思うけど?」

可愛らしく子供です、って顔でにっこり笑って見せてもあたしにとつては何か企んでるようにしか見えないそいつの笑顔を、無言でぎ、つと

睨み続けてやると、そいつは仕方無さそうに溜息を付いた。

「僕のIQが高いのも、可奈さんがおバカさんなのも事実なんだから仕方

ないでしょ? でも大丈夫だよ、『ハタチ過ぎれば只の人』って良く言うし、気にする事は無いよ」

「あんッたが頭良かろうが悪かろうがどっちでも良いのよ!! あたしが

ムカつくのはアンタの態度だ―ッ!!!!」

「…可奈さんて、ほんと変わってるよね」

「アンタに言われたく無いわよ―ッ!」

……こうして今日もあたしは図書館を追い出された。
覚えとけよ、クソガキ!!

あくまのささやき。

「別に良いじゃん。教えてくれるって言うんだから」

あつけらかん、とした口調で言い放ってくれた悪友に、あたしは思わず

ぎ、っときつい視線を向けてしまった。

そんなあたしに呆れたような視線をちらりと向けると、直ぐに自分の爪

へと視線を戻し再度熱心に磨き始めた。

「てかさ。人の話きいてる訳？」

あたしが一生懸命話をしている間中横で爪のお手入れをする手を止める

事の無かった佐和に、あたしは八つ当たりめいた感情をぶつけた。

「聞いてるわよく？だから返事してるじゃん」

確かに返事をしてくれるけど、口調が軽くてそのお手入れの熱心さ

と比べたら佐和の中での優先順位がどちらかなんて、聞かなくても良く判る。

思わず溜息を付いたあたしに、佐和は手を止めて面白がるような瞳を向

けた。

「何？」

「んゝ：何だっけ、その年下君？小学生だっけ？」

「：：そうだけど何？」

「あんたがそんなだからそのコもチョツカイ出したくなるんでしょ
うね」

「：『そんな』？」

心底楽しそうにそう言うが、あたしにはその意味が判らず聞き返すが、

結局佐和に上手くはぐらかされてしまった。

「それよりあんた、次何とかしないとマジでやばいわよ？」

どうするの？勉強？

そう問いかけられたあたしには返す言葉が無く、黙り込むしか無かった。

別に頑張っていない訳では無い…と思う。

でも、判らないものは判らないんだもん。仕方ないじゃない。

何度教えられても覚えられないし、最早何処がわからないかも判らない

からどうしようもない。

昔っから『おバカさん』なあたしには、どうする事も出来ないのだ。うん。正直、高校受かった事も奇跡に近いし？

…だからってあのクソガキに教わるのはアリエナイ。

誰が何と言ってもありえない！！

あの厭味ったらしい口調で何言われるかと思うだけでムカムカしてくる

んだから！

絶対！ありえないんだから！！

はた、と我に返ると、思わず握り拳固めてしまったあたしをまたしても

面白そうな瞳で佐和がにやにやと観察していた。

「な、何よ…」

「ねえ、可奈？もーちよっとズルくなっても良いんじゃない？」

…何か企んです、ってのがすごい良く判る口調で佐和が言った。

「佐和？」

何だかいやゝな予感がしてあたしは思わず身を後ろに引いた。

えっと、何だっけ？ こういうの：何か変に優しそうで作ってるカンジ
…あ、『猫撫で声』だ。

「あのねえ、可奈。教えて貰えば良いのよ、向こうが教える、って
言ってるんだから」

「絶対！ ヤー！！」

その言葉にどっか行きかけてたあたしの意識がぐわっと現実に取り戻
された。

反射的に佐和の顔を思いっきり睨みつけてしまう。

「よく聞きなさいよ、可奈。向こうが『教えてる』って言ってるの
判らなかつたら、あんたがイヤミでも何でも言って凹ませてやれば
良いのよ」

……はあ？

言ってる意味が判らないんだけど？？

「何よ、その間抜けな顔」

佐和が楽しそうに噴出しながら失礼発言をしてくれて、どうやらあ
たし

は思いっきり間の抜けた顔をしていたと気づき、慌てて表情を引き
締め
た。

あたしのその様子に笑いを堪えきれない、とばかりに佐和が笑い出
し、

あたしはまたしても佐和を睨み付けた。

「さーわー？」

「くくツ…ご、ごめんごめん。つまりね、あんたが理解出来なかつ
たら

向こうの教え方が悪い訳。判る？」

「え、と…」

「だからね。可奈が判らなかつたら、『あんたの教え方が悪いんだ』
って怒って良いって事よ」

て、事は…て事は、だよ？

まあ、嫌な前提では有るが、あたしはおバカさんだ。

それも並では無いおバカさん。

対する奴は確かに頭は良い、がしかし教師じゃ、ない。

オマケに年下。

がこの先生が教えてくれる事を理解出来なかったあたしに理解させる

のは楽じゃない、筈。

…あ、自分で言ってるムカついてきた…けどまあ、ここは堪えよう、うん。

で、で、だ。

そうだったら、あたしはあいつに思う存分イヤミを言える訳だ。

それも『正当』な理由で。

悪くない…悪く、ないぞ。

「ふふ。ね、可奈？教わった方が、良いでしょ？」

佐和がしてやったり、という顔で笑いながら言った言葉に、あたしはうかうかと大きく頷いて、いた。

いつかしめてやる!!

「うううう…」

目の前のありえない現実には、思わず呻き声が口から漏れる。
つか。呻き声しか出ない。

ナンなのよ、これ!? 何で!?

判らない時はせいっだいに文句を言ってやろうと教わる身にしては
かなりデカイ態度で臨んだ勉強会。
あたしはかなり信じられない思いで答えの出たノートを凝視してい
た。

…何で理解できちゃうかな、あたし?

がっこの先生が教えてくれる事を理解出来なかったあたしがどうして
こんなクソガキの説明で理解できる訳!?

いや。そもそも勉強してんだから理解出来るに越した事は無い。
無いのだが。……納得いかない。

「熊が消化不良起こしたような声出してどうしたの、可奈さん?」
のほほん、とした口調でさらりとムカつく例えをしたクソガキをあた
しはギツと音がしそうな程キツク睨み付けた。

「オトメに向かって言う事なワケ?」

耳に届く自分の声が普段より低くてかなりドスの聞いたものにな
っている気がするけど、この際どうでも良いや。

「オトメ…ねえ」

「…な、なによ?」

にやりと笑いながら何だか意味ありげにそう言ったクソガキに思わず
身構えながらそれでも強い口調で返してやる。

「あのさ、『乙女』の意味、知ってる?」

「あたしのどおこがオトメじゃないってのよ!？」

ついカチンときて握り拳固めて声を荒げると、クソガキは更に作り物っぽい笑いを浮かべていった。

「ふうん? 可奈さんは『乙女』なんだ?」

「:それは何かしら? あたしがジュンジョウでもカレンでも無いって言いたい訳?」

ジュンジョウ、もカレンも漢字変換出来ないけれど。

例えば誰かがあたしが『オトメ』だと認めてくれちゃったとしたら思いつき驚いてそいつの正気を疑うかも知れないけれど。

とりあえず言ってみるのはタダだし、自分で解ってても目の前で否定されるのはムカつく。

「:ああ、やっぱり」

あたしの怒りをあっさりと流しながら、何かすっごい自分だけ判っちゃつ

てます、て感じの顔であたしを見た。

「何よ!？」

「うん。だって可奈さん『乙女』って『純情な女性』って意味だと思つて

るでしょ?」

「はあ?」

それ以外に何の意味が有るってゆーのよ!?

「あのね、可奈さん、『乙女』って言うのはまあ、『年の若い女性』って

意味もあるし、今は可奈さんが思っているような意味でも使われたりする

るけどね。元々は『成人した若い女性』って意味だったんだよ」

1度言葉を区切ると、クソガキは何かを計るような瞳であたしを見た。

「:?? な、何よ!？」

その瞳の強さに思わず一瞬だけ肩をビクつかせてしまったあたしは、

それ

を隠すように思いつき強気な口調で返した。

自分の耳に届いた声が僅かに掠れて震えているようで、あたしは内心怒りを覚える。

どうしてこんな年下のクソガキなんか……!!

「ねえ可奈さん？『乙女』にはもう一つ、意味があるんだよ？」

そんなあたしに気付いているのかいないのか全く判らない。

でも面白がるような、そのくせ其処に何だか得体の知れない強い感情が有

るような口調でクソガキはゆっくりと口を開いた。

「もう一つはね、『処女の女性』って意味なんだ。ねえ、可奈さん？」

可奈さんは『乙女』なの？

無邪気そうに装ったとありありと判る子供っぽい口調でけろりとそう言っ

てくれたクソガキに、あたしは返す言葉も無かった。

自分の顔がもの凄く熱くなっている事を自覚して顔すら上げられなかった。

小学生コドモのクセに……ッ!! コドモのクセに!! コドモのクセに……!!
ちくしょう! いつかしめてやる!!

いつかしめてやる!! (後書き)

お読み頂き、ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1892q/>

しめてやる

2011年1月19日12時19分発行